れもあった。これは昭和 32 年三原山が噴火、中規模の噴火でしたが火山弾が飛び散り、これに直撃され 1 名即死、45 名の怪我人を出した。火山弾とは火口から噴出され、飛び散るマグマの塊で、大きいモノは 50kg 以上あるという、この大小様々のマグマの塊が弾丸のように飛ぶのですから、危険極まりないのです。

前例に懲りた役場は即座に避難を放送し、人々は東海汽船の発着場である元町の桟橋に集まってきました。

伊豆大島は東京都下ですから、都から要請された自衛艦、海上保安庁巡視船、東海汽船、他社のフェリー、漁船等、噴火から 3 時間後の午後 7 時半頃には元町沖に 30 数隻の船舶が集結したのですから、素早い行動でした。これは大島の位置が横須賀や横浜に近いという利点もあり、大島沖は大型船が常に航行している航路筋であり、船舶が集結し易かったのです。

ところが難題があり、元町の桟橋は海上に 1 本突き出ているだけの港で、防波堤はないのです。ですから 1 隻の船が接岸し、避難民を乗船させ離岸、次の船が接岸の繰り返し中に、溶岩流が元町に接近、急遽乗船港を島の反対側にある波浮港に変更、東海バスで移動決定、波浮へは差木地という道の狭い難所があり、30 数台のバスの移動は危険でしたが、無事波浮港に到着、ところが波浮港の海面が変色、これは熱せられた溶岩が海面に接し、水蒸気爆発する前兆です。さすが島民は長年の経験と勘で見分けることができ、船舶の接岸を諦め、元町に引き返します。

幸いにも元町に数百 m に迫った溶岩流が流れを変えたため、一時的に余裕ができ、その間に乗船しようと、最後の避難船が元町桟橋に接岸したのが 22 日午前 4 時 27 分全島民 1 万余人が無事避難することが出来た、13 時間の苦闘でした。

幸いにも 1 ヶ月後、噴火も収まり、安全宣言が出て、全島民が無事全員が島に帰ること出来ました。一人の怪我人も出さなかったことは幸いでした。

大島町役場の町を知り尽くした助役さんの献身的な働きがあったからです。

三宅島雄山の噴火